平成20年3月5日発行（年4回3・6・9・12月5日発行）通巻85号

特定非営利活動法人
幼い難民を考える会
CYR CARING FOR YOUNG REFUGEES

子どもたちの明日
Children, Our Future

2008年3月 NO.85

バンキアン地区保育所 ©小林正典

目　次

② 特集！トロピエンスバイ小学校 高学年の教室が完成
④ カンボジアへ行ってきました。
⑥ カンボジアの伝統織物展「サバーイ!! カンボジア」
⑦ 国内活動：写真家達によるチャリティー展 /CARE-WAVE AID ～僕らがそれをする理由～
⑧ ～連載寄稿～「チャンピオンを夢みて」フォトジャーナリスト 高橋智史さん

幼い難民を考える会（CYR）は、難民となったカンボジアの子どもたちがけんめいに生きようとする姿に触発され、1980年に組織されました。子どもたちが心身ともに健全に成長し、その親たちが人間らしい生活環境のもとで自立できることが、難民を出さない平和な社会につながることを信じ、復興をめざすカンボジアで活動を続けています。

開校式 写真：自治労福岡県本部提供

トロピエンスバイ小学校
新校舎が完成

プノンペン市副市長による

開校式のスピーチ（抜粋）

本日、トロピエンスバイ小学校の開校式を迎えられたことを、とても嬉しく思います。6年生まで多くの子どもが勉強できるようになりました。

みなさん、貧困を根絶するために、貧しい人々が読み書きできるようになることは大変重要です。トロピエンスバイのほとんどの村人はスラムから移動して来ました。生活が苦しいので、遠いところまでは子どもを学校に行かせられません。

これからはすばらしい環境の中で、そして家から近いところで勉強ができるようになりました。学校の備品などは、自分の財産だと思って丁寧に保存しください。地域の方々、村人、先生は仲良くし、協力し合わなければなりません。そして、学校が「良い種」のいっぱいある場所になるようにしてください。

この新しい学校を通して、子どもたちがもっと十分な教育を受け、希望を持って、自分の手で良い将来、そして豊かな国を作れること確信しています。

2007年12月18日

プノンペン市副市長　チューブ・コン

2007年12月、プノンペンの貧困層が多く住むトロピエンスバイ村では、トロピエンスバイ小学校の4教室・職員室兼保健室・地域の人たちの集会所が完成しました。

これまでの経緯

2005年、CYRはこの村に5歳児・小学1・2年生の教室の建設を行いましたが、高学年になると、約10キロ先にある小学校に通わなくてはなりませんでした。村民集会の場では、「6年生まで通える小学校がほしい。」「病院が遠くて医者に診てもらうことができない。」と訴える人が続出。これを受けて今回の支援を決定しました。

この地区の生活は

トロピエンスバイ村は、プノンペン市街から車で約30分。開発が進む中心部から強制的に移住させられた貧困層が多く住む地域です。この村の住人であるトロピエンスバイ小学校のピット・アン先生は、昨年CYRが行った家庭調査の時に、すべての家庭を一緒に訪問しました。村のほとんどの女性には仕事がありません。借金を抱えている人が多く、アン先生自身も「月10%の利息を払わなければならず、いつまでたっても利息を返すだけで、借りた元金が返せない。」と話します。調査からは、子どもにごはんを食べさせるお金がない、遠くの小学校へ送る手段がない、などの声が多く挙がりました。

アン先生

「トイレの水代は協力するよ」

池を埋めて建てられた校舎です。限られた土地を最大限に活用するため、トイレは階段の下に設置しました。トイレの水は、雨期には雨水をためて使えますが、乾季には購入します。月にトラック2台分（約4000リットル）が必要ですが、予算がありません。先生・村長・副村長などで構成する「学校運営委員会」で相談した結果、メンバーが水代の月10ドルを協力することになりました。1日の収入が5ドル以下の家庭（平均6.4人）が33%にものぼる村では、この10ドルは大金です。

みんなで力を合わせて

村にはごはんを十分に食べられない子が多いため、学校では朝の給食を提供しています。準備は始業前にしなければなりません。毎朝4時から給食作りが始まります。学校には電気がきていないため、車のバッテリーを使って明かりをつけます。子どもたちが到着する6時半ごろには、先生たちも一緒に手を洗い、給食を食べ、片付けなどの指導をします。

保護者には、給食費として100リエル（約3円）の支払いを呼びかけています。当初、この給食費が集まらないのではないかと心配していたのですが、12月には、63%の子どもが持ってきました。地域の人が、それぞれの立場で学校を大事にしています。

新しい学校ができて、子どもたちは、きれいな教室で、気持ちよく、また授業の前に給食が食べられるようになりました。学校からは、休まず元気に勉強する子どもたちの活気が伝わってきます。今後の課題は、運営委員会の仕組みを強化することと、保健室の活用を一緒に考えていくことです。

※この事業は、自治労3県本部（福岡・熊本・鹿児島）と故熊田知恵様のご支援で、実施しています。

村の子どもたち

カンボジアへ行ってきました！

2007年12月、前ページでご紹介した『トロピエンスバイ小学校の開校式』に出席した方々から、メッセージが寄せられました。

開校式に参加して

砂川 由弘さん
（自治労福岡県本部　執行委員長）

開校式へ参加する生徒たち

わたしたち自治労福岡県本部は、平和運動の推進と国際連帯活動の一環として、2003年からカンボジア・プノンペン市郊外の貧困層が多く住む地区で保育事業の支援を行ってまいりました。

昨年、熊本県本部と合同で同支援事業を視察した際、現地の住民の方やCYRの要請を受け、新たに熊本・鹿児島・福岡3県本部でトロピエンスバイ村に小学校を建設する方針を決定しました。その後、各県の組合員に建設資金のカンパをお願いし、昨年12月、ようやく小学校を開校することができました。

開校式には3県本部から10名が出席。労働組合の社会的な役割が問われている中で、参加者全員が現地の子どもたちの置かれる生活環境や就学の実態に触れ、「平和の尊さ」「貧困根絶の必要性」を再認識するとともに、自治労による「アジア子どもの家」支援事業がアジアとの共生、平和と貧困解消に向けた有意義な取り組みであることを確認しました。

自治労福岡県本部として、今後も厳しい生活環境下で生きるカンボジアの子どもたちの健全な発育と教育環境の充実に貢献していきたいと考えていますし、運動の輪を着実に拡大させていく決意を申し上げ、開校式の報告とさせていただきます。

安心な日々が早くきますように

田中 周子
（CYR 理事）

バンキアン保育所　© 小林正典

今年の2月17日でCYRは28才ですね。当初私は、1980年1月末から始まりました"難民救援ボランティアーズ交流会"の2回め、3回めに参加したことで、現在のCYRと出会いました。その折の報告から、混乱の続くカンボジアの状況を知るにつけ「何か力を出さねば…」の気持ちで先ず会員となりました。

今回ツアーにて初めてカンボジアを訪れました。日程の前半は、アンコールワット他の遺跡廻り。その多くは爪痕もそのままに、この国が抱えてきた厳しい歴史を語って居り、後半のプノンペンでは、それを博物館・小さなミュージアムにて確認。ポルポト政権により、またその後の内戦により、国中の家族がバラバラにされて今に続いていることに、心の痛みは止みませんでした。訪ねた小学校の開校式で出会った子どもたちに安心な日々が少しでも早くきますようにと願い、またCYRカンボジア事務所での関口さん、山極さんのご苦労を思いつつ、この28年の意義を感じました。

日本との時差は2時間。今もあの素晴らしかった夕日、遺跡の庭にあったクローバーのほとんどが4ツ葉だったこと、出会った多くの瞳をふっと思い出しています。

みんなが
保育所に通える日を願って

新村 真理子さん
（CYR ボランティア）

保育所の子どもたちと（バンキアン保育所）

「現場に行かないと、わからない」と言う山田理事に誘われて、トロピエンスバイ小学校の開校式に出席しました。2階建ての校舎は、住民の強い要望で建設されただけあって、副市長や大勢の在校生や父母が式典に参加していました。

読売新聞のバザーボランティア募集でCYRを知って7年。かねがね行ってみたいと思っていた3ヶ所の保育所を訪ねました。先生が読む本を静かに聞く子。庭を走り回る子。パズルに熱中する子。園舎はこじんまりしていて、雨季にはどろんこになってしまうという庭も、自分の幼い頃を思い出して、なつかしかったです。

先の小学校でもこれらの保育所でも、うらやましそうに門の外から中をながめている子どもたちがいて、この子たち皆が通える日の来ることを願いました。

今、東京の事務所で寄付へのお礼状を書いたりしています。遠回りではあるけれど、保育所の子たちへの支援のささやかな手助けになっているのでは、と思っています。

カンボジア保育現場を見学して

佐藤 顕子さん
（CYR インターン）

シーソーで遊ぶ ©小林正典

木造の小さな建物。それを囲む庭には子ども用の遊具がいくつか置かれていました。建物の壁には可愛らしい絵が描かれ、部屋の中からはその絵に似た子ども達の笑顔が覗いていました。見学という短い関わりの中でしたが、子ども達の発達はどの国も同じなのだと改めて思いました。そして、大きく影響しているのはやはり環境なのだと。

CYRには昨年の4月よりインターンとして関わらせていただいており、以前の保育士の経験からも理念には深く共感しています。ですから今回の見学は大変興味深く、保育についてより深く考える機会となりました。

愛されて大切に育てられた子は、人を愛し大切にできる大人になります。単純なことですが、とても難しいことです。なぜなら、育てる側の大人が幸せであることが不可欠だからです。両親も、地域の人も、もちろん保育士も。

食べること、遊ぶこと、眠ること、学ぶこと。すべてが安心できる楽しさの中にあることを願い、これからもお手伝いさせて頂きたいと思います。

カンボジアの伝統絹織物展

「サバーイ!! カンボジア」 2007年12月6日～8日

世田谷の閑静な住宅地にあるショールーム「ポンナレット」では、カンボジアの女性たちが心をこめて手織りしたシルクや、それらを生かした洋服・小物類が、会場いっぱいに並びました。「サバーイ!! カンボジア」と題したCYRの販売会。楽しい特別企画を毎日開催し、大勢のお客さまにお買い上げいただきました。

※"サバーイ"とはカンボジア語で"楽しい"の意味

● 特別企画は大盛況でした ●

お話会の様子

1日目

「カンボジアの織物の話」

関口 晴美（CYRカンボジア事務所長）

世界でも稀な絹織物で、寺院の壁や天井に飾られるピダン。会場では、高い技術で織られた繊細なピダン作品が紹介され、その素晴らしさに感嘆の声があがりました。

2日目

「カンボジアの食べ物の話＆スペシャルおやつの試食会」

福富　友子さん（旅の指さし会話帳⑲カンボジア　著者）

自然と共にありながら、季節の行事やその土地に根ざしたカンボジアの食文化。日本人には親近感や懐かしさを感じさせます。「かぼちゃのココナッツ煮」や、「小魚を揚げたおつまみ」を食べながら、美味しい時間を過ごしました。

かぼちゃのココナッツ煮

3日目

「クロマー（万能スカーフ）の巻き方ワークショップ」

バン・ソバタナ先生（東京外国語大学客員准教授）と学生さん

頭や腰に巻いたり、物を運んだり、ゆりかごにしたりと、カンボジアでの生活に欠かすことのできない「クロマー（木綿の布）」。現地の人々の知恵に驚かされます。参加者全員で様々な使い方を実践し、盛りあがりました。

クロマーを頭に巻く

● 織物事業担当からnews！です ●

藤本 若菜

3月より、常設販売スペースが六本木（事務局地下）にOPENしました。
カンボジアの織物製品を、お手に取ってゆっくりご覧いただけます。
お越しの際は、お気軽にお電話ください。
CYR東京事務局　Tel：03-3796-6377

写真家達によるチャリティー展

熊谷 正 さん

（フォトボランティア ジャパン 運営事務局）

寄贈式

写真展会場

2007 年 12 月 14 日から 17 日までの 4 日間、東京ミッドタウンにある富士フォトサロンにて、全国のプロ写真家達の協力で集まった写真作品を展示即売するチャリティー展を開催しました。

その収益金をアジアの恵まれない子供たちの教育支援のために使ってもらう為に、草の根的に活動している NGO や個人に託して活用してもらうことを目的に、毎年開催して、昨年で 11 年目を迎えました。

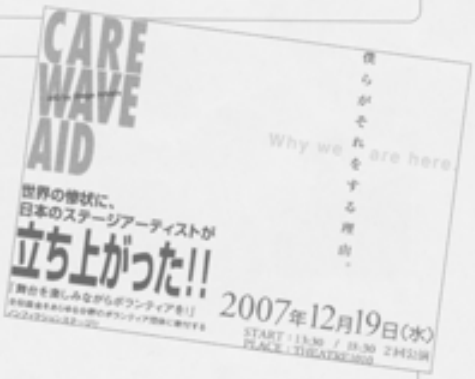
毎年その都度寄贈先を検討し決定していますが、今回は、「幼い難民を考える会」の事業計画であるカンボジアの子供たちへの絵本を送ることに賛同し、少しでもお役に立てばと思い、お贈りさせて頂くことに決定しました。

参加写真家人数 315 名、575 点の作品が展示され、迫力のある展示が出来ました。そして初日オープンから毎日、貴会のスタッフの方々にお手伝い頂き、おかげさまで、心地よいチャリティー展を催すことが出来ました。カンボジアの子供たちの未来に夢を託して微力ながらご支援出来たこと、参加写真家一同喜んでおります。今後も貴会の益々の発展をお祈りいたしております。

熊谷さんが、インターネットラジオblue-radio.comに出演され、チャリティー展についてお話されました。
http://www.blue-radio.com/hoshizora/070.shtml

チャリティミュージカル

CARE-WAVE AID
～僕らがそれをする理由～



鎌田　真由美さん
（CARE-WAVE 実行委員会　代表）

『CARE-WAVE　AID』は、国内外の惨状や社会問題を、ミュージカルを通してお客様に問題提起するという日本初の本格的なチャリティ公演を行っています。国内外のミュージカル界のスタッフ・キャストがボランティアで参加し、全収益金を各種の NGO・NPO 様に等分に寄附させて頂いています。そして、舞台からお客様に NGO 団体様の活動内容をご紹介し、ご理解頂くことによって、より多くの方々のボランティア参加につながるよう、お手伝いが出来ればと願っております。まだまだ微力では御座いますが、これからもお客様と CYR 様をはじめ NGO 団体様の架け橋となれるよう、クオリティの高い舞台作りを目指して参りますので、何卒宜しくお願い致します。

●鎌田真由美さん、プロフィール●

劇団四季に13年間在籍。『CATS』『コーラスライン』『WEST SIDE STORY』『EVITA』ほか多数の作品に出演する傍ら劇団のダンストレーナーとして後進の指導にあたる。退団後、数多くのミュージカル・コンサート・テーマパークの振付師として活躍するとともに、演出も手掛ける。2006 年 CARE-WAVE 実行委員会を立ち上げる。

お互いに協力しあいながら、毎日ハードなトレーニングを重ねるエイブートーンの生徒たち。

『チャンピオンを夢みて』

フォトジャーナリスト　高橋 智史　さん

カンボジアで最も人気のあるスポーツは何かと人々に聞くと、皆、口をそろえてこう言う。「キックボクシングだよ」と。そのカンボジアキックボクシング界には一人の偉大な英雄がいる。名前は「エイブートーン」。ヘビー級のプロキックボクサーで、カンボジア人で彼の事を知らない人はいない。

彼は10代前半という若い時期から才能を開花させ、今まで188回の試合のうち、カンボジア人に負けたのはわずか2回しかない。今年で30歳になるが、最近は外国人との試合を主に行い、衰えを知らないファイティングスピリットで常に観客の視線を釘付けにしている。

若くして成功し、英雄となったエイブートーンだが、暮らしはとても質素で少しの驕りもない。今はプノンペン郊外に暮らし、地方から彼に憧れてやってくる若いボクサー達を自らの家に住ませ、指導を行っている。

「先生と一緒に練習をする時が一番嬉しい時間です。先生は絶対に威張らないし、優しい」。そう話してくれたエイ・ダラーさん(19歳)もエイブートーンに憧れている生徒の一人だ。2年前にプレイヴェン州から出てきて、エイブートーンに懇願し、指導をしてもらえるようになった。「小さい頃、喧嘩が弱くてよく負けていた。だからずっと強さへの憧れがあったんです」。今では毎日の厳しいトレーニングの成果もあって筋肉の鎧を身につけている。エイ・ダラーさん以外にも、数十人の若い生徒達が明日のエイブートーンを夢みて、週末にある試合に人生のすべてをかけて戦っている。カンボジアには数千人を超える若いキックボクサーたちがいるが、エイブートーンのように成功できる人はほんの一握だ。彼らの思いの根底にあるのは、多くが貧しさからの脱却の為、両親を養う為に戦い続け、成功を勝ち取りたいという切なる願いだ。「これから減量をしなくちゃいけない、減量は大変なんだよ」と、真剣勝負の世界に生きるエイ・ダラー君のはにかんだような笑顔が、今でも忘れられない。

●高橋智史さん、プロフィール●

フォトジャーナリスト。1981年10月6日生まれ、秋田市出身。高校卒業後、日本外国語専門学校国際ボランティア学科入学。その後、日大芸術学部写真学科で写真を学んだ。カンボジアを主に東ティモール、アフガニスタン、スマトラ沖地震津波被災地などのアジアの問題、人々の営みを取材し雑誌、写真展などを通じて作品を発表。今春、カンボジアのプノンペンに移り住み、取材活動を続けている。秋田魁新報社「素顔のカンボジア」でフォト＆ストーリーを連載中。

ＣＹＲの活動をご支援ください

年会費　正会員 ￥10,000　学生会員 ￥3,000　団体会員 ￥30,000

下記の口座にご送金ください。
郵便振替　No.00110-8-36227（特活）幼い難民を考える会　銀行振替　三菱東京 UFJ 銀行六本木支店（普）No.1351747
特定非営利活動法人　幼い難民を考える会

※CYRは認定 NPO 法人です。5,000 円を超えるご寄付は寄付金控除の対象となります。

特定非営利活動法人
幼い難民を考える会
CYR CARING FOR YOUNG REFUGEES

〒 106-0046 東京都港区元麻布 3-2-20 丸統麻布ビル 2F
TEL：03-3796-6377　FAX：03-3796-6399
Email：info@cyr.or.jp
URL：http://www.cyr.or.jp

子どもたちの明日 85 号
◆発行日 2008 年 3 月 5 日
◆発行人：深水正勝